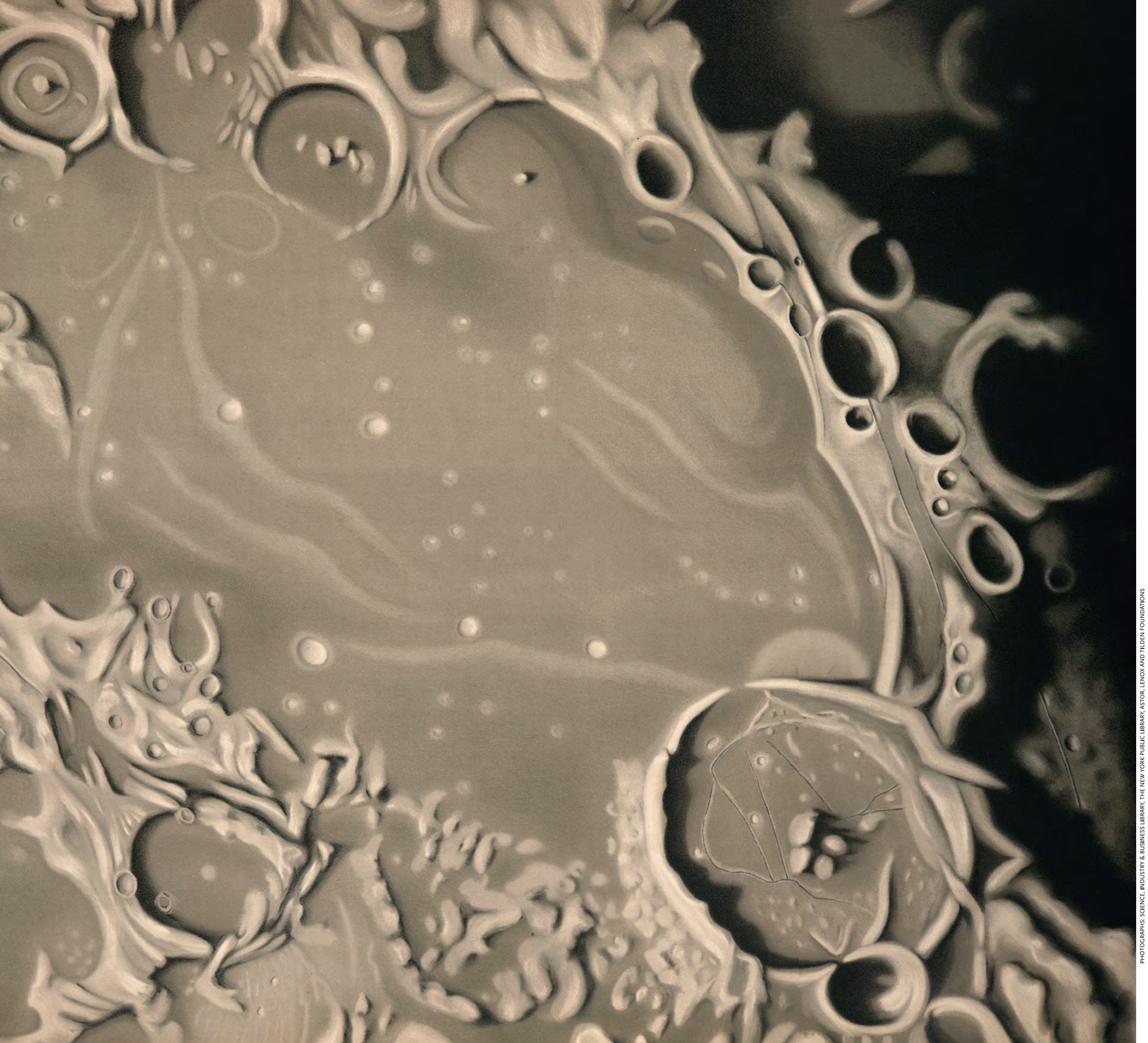
CAPTURING THE STARS

光年の彼方を描く

19世紀の画家、エティエンヌ・レオポール・トルーヴェロ。天文学者でもあった彼が描く天体のイラストレーションには、遥かなる宇宙の風景がきわめて現代的に表現されている。

文 ジュディス・ベンハモー＝ユエ



偶然は時として人生を全く意外な方向へ導く。画家エティエンヌ・レオポール・トルーヴェロの人生もそうだ。1827年にフランス北東部のエーヌ県で生まれた彼は、アマチュアの昆虫学者でもあった。熱烈な共和主義者で、1851年にルイ＝ナポレオンがクーデターを起こすと、米国への亡命を決意。1855年、家族を連れて大西洋を渡り、マサチューセッツ州のメドフォードに落ち着いた。その小さな町が、あのハーバード大学を擁するボストンの程近くに位置していなかったら、トルーヴェロの人生は全く異なるものになっていたかもしれない。

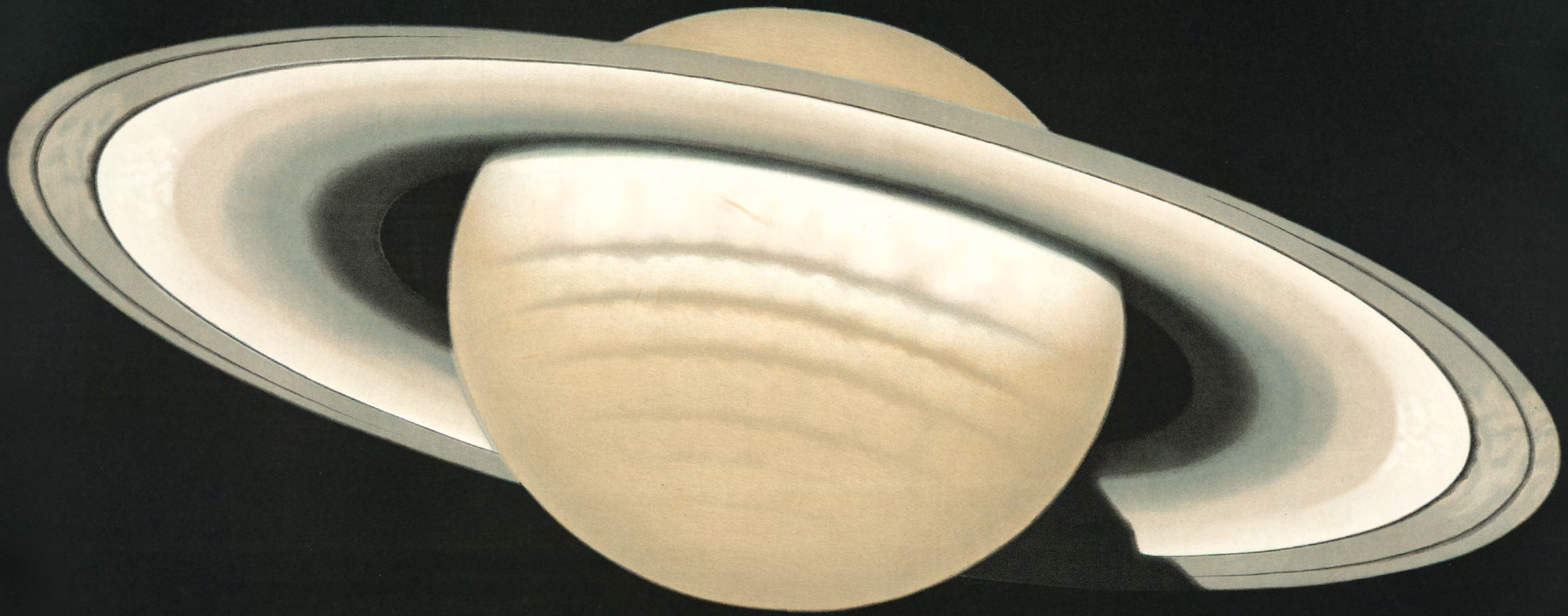
トルーヴェロは家族を養うためにボストンで肖像画を描いていた。そんななか、もとより自然観察を趣味としていた彼は、庭でカイコを飼い始めた。病気に強い品種をつくるため、ヨーロッパからマイマイガを取り寄せて米国種のカイコガと交配させようとしたのだが、不運にもある晩、ひどい嵐に見舞われ、飼育ケージが吹き飛ばされてしまった。虫たちは逃げ、野生化したマイマイガは北米の森林に大きな被害をもたらす外来種となり、今日もなお猛威をふるっている。当時、トルーヴェロは当局に警告をしたのだが、それは虚しい努力だったといえよう。この出来事があってから、彼の昆虫学への興味はすっかり冷めてしまったようだ。

しかし、彼はすぐに、より実り豊かな興味の対象を見つける。1870年代に入って間もない頃、トルーヴェロは夜明けの空が異様なほどに輝く現象に遭遇した。オーロラボレアリス、北極光だ。彼は、天空の風景を叙情的かつ精緻な筆致で描き始め、やがてハーバード大学天文台の台長を務めるジョゼフ・ウィンロックの目に留まることとなる。トルーヴェロの作品に魅せられたウィンロックは1872年、彼を研究チームに迎え入れた。その3年後、トルーヴェロはアメリカ海軍天文台の66センチ屈折望遠鏡を使うことを許されている。トルーヴェロの名声はフランスにも届き、1882年――この時、ルイ＝ナポレオンは過去の人となっていた――パリの有名なムードン天文台に招聘された。そこでも彼は精力的に天体をスケッチし続け、生涯に約7000点にのぼる作品を残している。

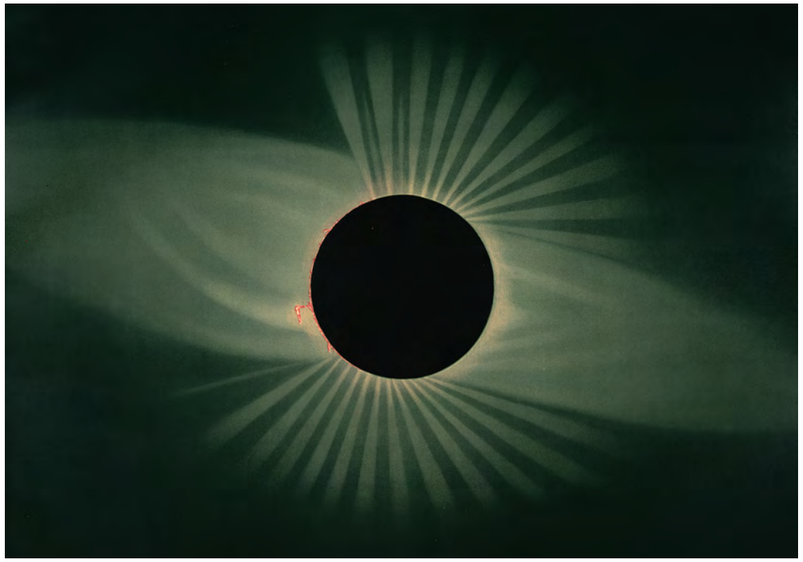
2001年にニューヨーク公立図書館で、トルーヴェロが19世紀に描いた絵画と、NASAが撮影した天体写真を並べて展示するという、啓蒙的な展覧会が開催された。この時、緒言として、天文学者マリア・ミッチェル（1818年～1889年）の次のような言葉が掲げられている。

「科学の分野では、とりわけ想像力が必要と

PHOTOGRAPHS: SCIENCE, INDUSTRY & BUSINESS LIBRARY, THE NEW YORK PUBLIC LIBRARY, ASTOR, LENOX AND TILDEN FOUNDATIONS



トルーヴェロは、イラストに描いた天体を観察した日時を詳細に記録していた。
［7ページ］
1868年11月13日の晩に観察して描いた11月流星群（しし座流星群）。
［8-9ページ］
（左）1875年に観察した月の湿りの海にあるクレーター群。
（右）1880年11月1日に観察した木星。
［前見開きページ］
1874年11月30日に観察して描いた土星。
［当見開きページ］
（左）1878年7月にワイオミング州クレストンで目撃した皆既日食。
（右）1872年3月1日に観察したオーロラ。



されます。あらゆることに疑問を持つこと。数学や論理だけでなく、美や詩的なことも必要なのです」

トルーヴェロのイラストレーションは、まさにこの言葉を裏づけている。なぜなら、生来の素質に導かれて科学の道に進んだ彼は、画家として、その作品に神秘的特性ともいうべき荘厳さを与えているからだ。彼の作品は、フランスの夢想的建築家エティエンヌ・ルイ・ブーレーが18世紀に描いた絵画を思い起こさせる。トルーヴェロは、巨人や浮遊する眼といったモチーフを精緻に描きシュルレアリストの画家たちに影響を与えたオディロン・ルドン（1840年～1916年）などの作品を目にしていたかもしれない。芸術的着想の源泉が何であれ、トルーヴェロの作品の価値は、米国のチャールズ・スクリブナーズ・サンズという出版社が1881年に、彼の天体画15点を収めた画集を125ドルという高値で出版したことによって確定的なものとなった。

ニューヨーク公立図書館の展覧会で、トルーヴェロの絵画は、精密さにおいては当然ながら最新の科学写真に敵わなかったが、そこには見る人の心をつかむ圧倒的な力が備わっていた。そこでは、冷徹な科学と独創的な主観が対峙している。トルーヴェロ自身、「私の狙いは――最新の巨大な望遠鏡を通して、天体のさまざまな現象が、熟達した専門家、熟練した画家の目にどのように見えているかを表現するために――対象に備わっている独特の優美さや繊細な姿かたちを細部まで精密に描くことにある」と語っている。この言葉のなかに、彼の作品に備わる独特な魅力をひもとく鍵がある。トルーヴェロの絵画は、非常に精密でありながら、着彩は創作的な意図に基づいて施されている。これは、自然を凝視していると、月が顔に見えてきたり、雲が想像上の何かに見えてきたりするのと同じことなのだ。「湿りの海」（8～9ページ）には、人の手で描かれた絵画ならではの情趣があって、レースの編物や漆喰装飾のようにも見える。プロミネンスを描いた「太陽の突起」などは、さながら古書の装丁に使われるマーブル紙のようだ。

エティエンヌ・レオポール・トルーヴェロは1895年にフランスのムードンで他界した。科学が長足の進歩を遂げた今日、宇宙を叙情的に描く絵画の先駆者に敬意を表して、月面のクレーターのひとつに彼の名が付けられている。 ✥